

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520115

研究課題名（和文） 銅板油彩画の誕生とその展開—16世紀南北ヨーロッパ美術の交流の観点から—

研究課題名（英文） The birth and development of the copperplate painting: the cultural exchange between the northern and southern Europe

研究代表者

平川 佳世（HIRAKAWA KAYO）

京都大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：10340762

研究成果の概要（和文）：本研究では、銅板上に油絵具を用いて絵画を描く「銅板油彩画」の誕生と黎明期の展開について、現存する画像作品および文字資料に基づいて、詳細かつ包括的な考察を行った。その結果、「銅板油彩画」は1530年代のイタリアにおいて「諸芸術の優劣論」および「北方絵画愛好」という二つの異なる文化的文脈において個別的に誕生し、「銅」という素材のもつ永遠性に着目した政治的寓意画の制作などの新奇な試みを経て、やがて、16世紀末には、ジャンルを問わず細密描写を得意とする画家が名声を得るための一つ的手段として定着していったことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This is a comprehensive research on the birth and development of the copperplate painting (that is, the painting painted by oil on a copperplate), based on existent works of art and archive materials. It explores that the copperplate painting was born in the cultural contexts of ‘*paragone*’ as well as of ‘the collection of northern European artworks in Italy’, developed as a novel medium which realized political allegories connoting the eternity, and established oneself as the best vehicle for miniaturists of various genres to obtain the fame at the end of 16th century.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：美術史、芸術諸学、西洋美術、絵画技法、マーケティング、細密画、ネーデルラント、イタリア

法が開発されて以降現在に至るまで、油彩画の支持体として一般に用いられているのは「木材」と「カンヴァス」である。これらに対して、耐久性においてはるかに優れ、小型にしつらえても反りや破損をおこさず、表面も均質で滑らかな「銅板」は、細やかな筆遣いを可能とし、油絵具固有の輝きを存分に引き出す支持体として、細密描写を魅力とする小型絵画の領域でしばしば用いられた。とりわけ、17世紀のネーデルラントでは、ヘリット・ダウなど細密描写を得意とする画家たちが優れた小型銅板油彩画を数多く制作している。こうした17世紀の作例については、先行研究によって、その制作過程、受容様態、同時代の芸術理論との関連等がある程度明らかにされている。しかしながら、16世紀における「銅板油彩画」誕生の経緯、および、黎明期特有の複雑な発展過程については、未だ十分に解明されているとは言い難い。

銅板油彩画の最盛期である17世紀、この領域で積極的に制作を行ったのがネーデルラントの画家達であったため、「銅板油彩画」はネーデルラントの産物であるとみなされる傾向がある。しかしながら、その黎明期である16世紀の優品は、興味深いことに、イタリア人画家、あるいは、イタリアに滞在した北方画家によって制作されている。こうした極めて興味深い事実は、揺籃期の16世紀「銅板油彩画」が、板絵やカンヴァス画との単なる支持体の相違に留まらない、当時の文化状況に根差した多様な問題を内包している可能性を示唆するものであり、16世紀「銅板油彩画」の体系的な研究は、16世紀における南北ヨーロッパ美術の研究に必ずや新たな指標を与えるであろうとの所見をえて、ここに、本研究計画を立案するに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、銅板上に油絵具を用いて絵画を描く「銅板油彩画」の誕生と黎明期の展開について、南北ヨーロッパ美術の交流という観点から包括的な考察を行うことにある。当該研究期間内に本研究が明らかにするのは、具体的には、①「16世紀初頭、どのような文化的文脈のなかで銅板油彩画が誕生したのか」②「1560年代、銅板油彩画が本格的に制作されるようになったのはいかなる契機があつたのか」③「16世紀末の銅板油彩画の流行は、どのような芸術状況に起因してのことか」という3点である。これらの諸問題を、関連作品や史料を精査しつつ、「銅」という支持体をもつ物質的長所と象徴性」「イタリアにおける北方絵画愛好」「北方画家とイタリア人画家との競争」「イタリアの芸術理論に対する北方画家の応答」等の観点から、詳細に考察する。

3. 研究の方法

16世紀における銅板油彩画の誕生と展開について、主としてイタリア美術と北方美術の交流の観点から包括的な考察を行うという本研究目的を達成するにあたっては、「16世紀前半における銅板油彩画の誕生」「1560年代における銅板油彩画の本格的な制作の開始」「16世紀末の銅板油彩画の隆盛」という3段階の時系列に沿って、それぞれ該当する事例の調査収集、作品制作、受容形態および歴史的な文脈の考察を順次行っていく。

本研究が扱う諸作品は、小型作品であるが故に図録等にカタログ化されていないものが多数存在する。そのため、研究に際しては、まず、ヨーロッパ各地のコレクションに散在する該当事例の実見調査およびデータベース化を行う。加えて、16世紀の美術愛好家のコレクションの全体像を把握すべく、財産目録等の文字資料の解析にも積極的に取り組む。また、イタリアの美術愛好家の北方絵画に対する嗜好をより具体的に把握すべく、北方絵画について15世紀以来記されたイタリアの芸術理論等の読解も合わせて行う。

本研究に必要な不可欠な技法的問題の考察に際しては、油彩画制作および技法研究を専門とする岩岡浩二を連携研究者として迎え、実制作者の視点からの分析や技法の復元等も交えて、多角的に取り組む体制を整える。

4. 研究成果

銅板上に油絵具で絵画を描く試みが最初に確認されるのは、E. P. バウロンらの先行研究によると、銅版画が隆盛するドイツでも、また、細密描写の伝統を誇るネーデルラントでもなく、イタリアの地であるという。

確かに、ヴァザーリは『芸術家列伝』において、銀、銅、鉛その他の金属に絵画を描くセバステアーノ・デル・ピオンボの試みについて伝えている。また、コレッジオの《改悛のマグダラのマリア》(ドレスデン絵画館旧蔵、1945年に消失)は実際に銅板上に描かれていたことが知られている。本研究では、まず、先行研究によって指摘されたこれら2例が、存在が確認される最初の作例であることを改めて認めた上で、これらが制作された文化的文脈を探った。

その結果、16世紀前半のイタリアにおける銅板油彩画誕生の直接的背景としては、まず、当時、盛んであった「パラゴネ／諸芸術の優劣論」との関連が指摘された。「パラゴネ」において絵画の欠点としてしばしば指摘されるのが、支持体の脆弱性に起因する耐久性のなさである。ヴァザーリの伝えるセバステアーノ・デル・ピオンボの実験は、彫刻

に比肩する耐久性を有する油彩画を目指したものであり、それを実現する金属の支持体の一つとして、当時、銅版画制作を通じて比較的画家に馴染み深かった銅の板が採用されたと考えられる。また、セバスティアノが金属板に留まらず石板や石壁に油彩技法を適用するに至った背景には、1520年代のローマにおけるミケランジェロ派とラファエロ派の競合という個別事情があったことも指摘しうる。

一方、セバスティアノ・デル・ピオンボとほぼ同時期にあたる1530年代、コレッジョと、やや遅れてパルミジヤニーノが銅板油彩画を制作した形跡があった。彼らの作品は現存しないが、同時代の財産目録や関連する画像資料から、それらが、小型の画面に細やかな筆致で入念に描かれた祈念画または肖像画であったことがわかる。これら2例から想起されるのは、イタリアにおける北方絵画愛好であろう。15世紀後半以降、イタリアの美術愛好家間では北方画家による精緻な小型油彩画が礼賛され、薄くかつ小画面に耐える硬質な木材であるオーク材に描かれたネーデルラントの小型祈念画や小型肖像画が、古代のカメオや貨幣、ブロンズ小像と並ぶ貴重な収集品として、イタリアの美術愛好家の書斎兼収集室に収められた。「銅板油彩画」という究極の細密描写を可能にする絵画形態の開発には、北方の小型油彩画を審美的理由から収集し、賞賛したイタリア人美術愛好家の嗜好が関与していた可能性が高い。例えば、アントニオ・デル・ポライウオーロの《ヒュドラと戦うヘラクレス》(フィレンツェ、ウフィツィ美術館蔵)は、ネーデルラント産オーク材と思われる極めて薄い板に描かれており、こうしたイタリアにおいて制作されたネーデルラント産オーク材に描かれた小型油彩画が、当地における「銅板油彩画」の前身と考えられる。イタリアは気候上、オーク材のような小型絵画に適した硬質な木材を産出しておらず、愛好家の間で珍重された北方絵画に比肩する細密画を制作するに際し、イタリア人画家たちは、ネーデルラント産オーク材に比べ入手の容易な銅板の可能性に目を向けることになったのである。

セバスティアノやコレッジョの1530年代の試みを経て、1560年代のフィレンツェにおいて、銅板油彩画は本格的に制作されるようになる。1560年代のフィレンツェの作例の中でも、本研究がとりわけ注目したのが、ブロンズイーノ作《幸福の寓意》(1567年頃、フィレンツェ、ウフィツィ美術館蔵)であった。本作品については、すでにグラハム・スミスらがフィレンツェ公ゴジモ・デ・メディチ1世の嫡男フランチェスコ・デ・メディチと神聖ローマ皇帝マクシミリアン2世の実妹ヨハンナの婚礼用祝祭装置との関連を指摘

している。こうした先行研究を踏まえ、本研究では同時代の記述や素描をもとに同祝祭装置の具体像を明らかにした上でブロンズイーノ作品と改めて照合し、ブロンズイーノ作品が祝祭の残滓を留めつつもフランチェスコ個人の為政者としての特性の称揚に重きを置く内容となっていることを明らかにした。この種の政治的寓意は大画面絵画として描かれるのが通例であるが、君主の婚礼や戦勝に際して金属製メダルや小型浮彫りを制作する習慣や、さらにはフランチェスコからマクシミリアン2世への贈呈品とされたジャンボローニャのブロンズ製浮彫り等の存在から示唆を得て、ブロンズイーノは不朽性を具現する素材として敢えて小型銅板に着目したと考えられる。ブロンズイーノの《幸福の寓意》を契機に、宝石のような質感と不朽の含意という付加価値を備えた銅板油彩画は君主の書斎を飾るにふさわしい小品として政治寓意画に新たなジャンルを形成することになり、この種の需要が16世紀後半以降の銅板油彩画の流行の一翼を担ったのであった。加えて、ブロンズイーノに続き、ヴァザーリやアレサンドロ・アッローリらも銅板油彩画制作に順次着手することとなり、こうしたフィレンツェのメディチ宮廷の動向が、本宮廷と外交や芸術家間の交流等を通じてつながるヨーロッパの諸宮廷へと波及し、16世紀後半の銅板油彩画の流行の素地を形成したのである。

とはいうものの、イタリアの地において、フィレンツェ派の動向にいち早く反応したのが、ネーデルラントの画家スプラングルである。周知の通り、スプラングルはその技巧的、官能的な裸体画で北方マニエリスムの白眉ともいえる画家である。しかし、こうした後年の姿とは異なり、少年期、アントウェルペンで風景画家の工房で徒弟修業を行い、1565年、人物画を志向してイタリアへと出立した後も、当地の優れた人物画家たちとの競合に耐えるため、北方画家の得意とされた風景表現を中心とする作品を制作するなど、極めて戦略的な振る舞いをしていたことが確認される。また、スプラングルは、油彩技法に加え、イタリアでの芸術活動に必須のフレスコ技法や、水彩カンヴァス画といったイタリアでは珍しい技法を積極的に習得したことが知られる。多種多様な技法を用いることで他の画家との差異化を図る意図のもと、新奇なメディウムであった銅板油彩画にもいち早く関心が向けられたと推測されるのである。

1566年からの9年間のローマ滞在中、スプラングルが描いた銅板油彩画はおおよそ7点、スプラングルの絵画は小型であるにも関わらず高額で取引されていたというファン・マンデルの記述を裏付けるかのように、それら

はみな極めて入念な仕上げを有している。1570年、スプランゲルは、アレッサンドロ・ファルネーゼ枢機卿や細密画家ジュリオ・クロヴィオの推挙を得て、時の法王ピウス5世に謁見し、その後、宮廷画家に任命されることとなる。法王は1572年には死去したため、宮廷画家としての活動は2年あまりであるが、その間に法王がスプランゲルに依頼したことが確実な作品は、すべて銅板の支持体に描かれた油彩画であった。こうした事実からも、スプランゲルのローマでの名声確立に銅板油彩画が多なる役割を果たしたことが窺えるのである。

1570年代、ローマに滞在したスプランゲルがこの新奇なメディウムを存分に活用して当地の厳しい競争を勝ち抜いて以降、銅板油彩画はイタリアの画家との差異化を最も図りうる領域として、元来、細密描写に長けた北方画家の間に速やかに浸透していった。なかでも興味深い動きを示したのが、ヤン・ブリューゲル（父）である。ヤンはイタリア滞在中の1590年代前半からネーデルラント帰郷後の1600年代に集中して、いわゆる「地獄絵」を手がけた。「地獄絵」は文字通り地獄と奇怪な悪魔を題材としたもので、16世紀前半にボスの追従者達が制作して以降、北方画家の得意な画題として、イタリアでも人気を博していた。ヤン・ブリューゲル（父）はイタリア滞在中、この「地獄絵」に積極的に取り組んだが、その際、彼は、高尚さに欠ける「滑稽な主題」とされていた「地獄絵」を目の肥えた芸術愛好家の鑑賞に堪えうるものにすべく、古典主題に物語場面を求める、ラファエロの人物造形に依拠するなど様々な工夫を凝らした。そうした試みの一環として、地獄絵特有の魅力である漆黒の闇と紅蓮の炎の描写を引き立たせるべく、ヤンは、細密描写に適しており、かつ、油彩絵具の発色を最大限にひきだす銅板を選択したのである。ヤン・ブリューゲル（父）の成功が一つの契機となって、地獄絵や風景画など、いわゆる絵画ジャンルのヒエラルキーの下位に属する画題を、その描写の妙により際立たせるため、風景画家の間でも銅板という支持体が積極的に用いられるようになったと考えられる。

以上、本研究においては、17世紀以降の銅板油彩画の隆盛を準備した、16世紀前半より様々な文脈と関連しつつ綿々と続いた銅板油彩画をめぐる多種多様な試みが明らかにされた。「銅板油彩画」の萌芽期の諸相について実作品および史料に基づき詳細かつ包括的な論証を行った本研究は、国内外の美術史学において極めて独創的なものであり、その成果は、「銅板油彩画」という個別領域にとどまらず、16世紀の南北ヨーロッパ美術を論じる上で、極めて重要な視座を提供するも

のである。今後は、銅板油彩画の急速な普及に関わったと想定される受容空間についての考察が必要となる。その対象としては、珍品、貴品を収集、保管するいわゆる「収集室」が想定される。16世紀後半、邸宅の一角に「収集室」を構える実践が都市の富裕層に広まるが、「収集室」には宝石や古代の貨幣、生物標本など小型で貴重な品々に匹敵する新奇で高価な小絵画が求められたのである。「収集室」における銅板油彩画の受容形態や「収集室」に設置された「アート・キャビネット」への銅板油彩画のはめ込み等について、今後、さらに研究をすすめる所存である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

- ① 平川佳世、「聖なるもの、家族、政治—クラーナハ作「聖親族祭壇画」をめぐる」、京都大学学術出版会、中村俊春編『絵画と私的世界の表象』、査読有、2012年、61—88頁
- ② 平川佳世、「スプランゲルのイタリア滞在一銅板油彩画の観点から」、『京都美学美術史学』、査読有、10巻、2011年、133—162頁
- ③ 平川佳世、「家族の肖像—クエンティン・マセイスの《聖女アンナ祭壇画》にみる理想の家族像」、ありな書房、蛭川順子編、『初期ネーデルラント美術にみる個と宇宙』、査読有、1巻、2011年、129—162頁
- ④ 平川佳世、「幻の名画を求めて—16、17世紀におけるデューラー素描の絵画化」、『言語文化』、査読有、28巻、2011年、45—71頁
- ⑤ 平川佳世、「マールテン・ファン・ヘームスケルク作《ヘレネーの略奪》にみる型の踏襲と刷新」、『平成19年度～平成22年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書「模倣の意味と機能—写す・抜き出す・変容させる」』（研究代表者・京都大学文学研究科・教授・根立研介）』、査読有、2011年、37—58頁
- ⑥ 平川佳世、「つかのまと不朽の間—ブロンズイノー《幸福の寓意》」、『京都美学美術史学』、査読有、9巻、2010年、1—34頁
- ⑦ 平川佳世、「クラーナハ作《聖親族祭壇画》にみる聖なるもの、家族、政治」、『京都大学GCOE国際共同研究「研究成果報告」』、査読有、2010年、27—46頁

〔学会発表〕（計2件）

- ① 平川佳世、「幻の名画を求めて—16、17世紀におけるデューラー素描の絵画化」、

- 「デューラー受容史 500 年シンポジウム」、2010 年 11 月 13 日、明治学院大学
- ② 平川佳世、「ルーカス・クラナハ作《聖氏族祭壇画》をめぐって」、「国際共同研究「東西の美術における家族、家庭、子供の表象」研究会「東西の近世美術と親密圏の表象」」、2009 年 8 月 1 日、京都大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平川 佳世 (HIRAKAWA KAYO)
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：10340762

(2) 連携研究者

岩岡 浩二 (IWAOKA KOJI)
近畿大学・文芸学部・教授
研究者番号：40340757